

# 高齢者を中心とした社会を創る学びの広がり

— 岡山県の中山間地吉井町の事例 —

小 出 隆 司

## 〔抄 録〕

高齢社会は21世紀の避けがたい課題として受けとめ、高齢者の生きがいと社会参加を真剣に考えなければならないことが今や共通の認識になりつつある。高齢者というとすぐに福祉の問題に関心が集まりがちである。しかし80%の高齢者は健康であり、自分の生きがいを求めてサークル活動などに積極的に参加し、こうした活動を通して主体的に地域社会にかかわっていきこうとする動きが強まっていきつつある。そうした動向を岡山県中東部に位置する中山間地の高齢者を中心とする地域づくりの事例で検証する。中山間地では60歳代から70歳代の高齢者は地域社会において多数を占める年齢層であり、経済的には年金と農業で安定した生活を送っている。高齢者は自分自身の楽しみ、生きがいを求めてサークルに集い自己啓発を行いながら多くの仲間に出会い、地域課題に立ち向かう動きが見られる。そうした活動の組織原理は、従来型の伝統的な地域コミュニティ組織を基盤とするのではなく、共通の要求によって組織されたアソシエーション的組織を立ち上げて共同の活動を創り出し、その活動を通して周囲の地域住民を巻き込み、地域社会に一定の影響を与える方向に向かいつつある。今日、こうした高齢者を中心とした地域創生の活動は、人々の価値観を転換させ、社会の質を転換させる可能性を秘めているといえる。

キーワード：高齢者の地域参加活動

## 1. はじめに

高齢者（65歳以上）が総人口に占める割合を高齢化率というが、その比率が7%を超えた社会を「高齢化社会」、14%を超えると「高齢社会」と呼んでいる。わが国はかつてない速度で高齢化が進み、1996（平成8）年の15.1%から2020（平成32）年には25.5%になると予測されている。高齢社会の進展は社会にさまざまな変化をもたらすと予測されている。高齢社会を21世紀の避けがたい課題として受けとめ、高齢者の生きがいと社会参加を真剣に考えなければならない

ないことが今や共通の認識になりつつある。従来高齢者というとすぐ福祉の問題に関心が集りがちであった。しかし、80%の高齢者は健康であり、自分の生きがい求めてグループ活動などを通して積極的に地域社会にかかわっていかこうとする動きが強まっているのも事実である。1999（平成11）年の生涯学習審議会答申は、地域社会における自主的・社会的参加学習が広がりをみせていること、そうした学習が個人の楽しみだけにとどまらず、地域づくりの方向へと発展していきつつあることを指摘している<sup>(1)</sup>。

戦後から今日まで、地域社会の問題は過疎・過密の問題に象徴されるように人口移動や産業構造の問題として捉えられてきたが、現在の地域社会問題は重要な人間形成環境である学習・教育の場として捉えられる方向に向かっているといえる。バブル崩壊後多くの自治体は財政面では多額の赤字を抱え、地域の活性化を従来の箱物づくり、産業の振興だけでなく人づくりに求める方向を模索しつつある。住民の側も従来の物質的豊かさのみの価値志向から、自分らしい生き方を求める方向が芽生えかけている。規制緩和のもと地方分権が叫ばれつつある現在、地域の特性を生かした生活環境づくりが生涯学習を媒介として模索されつつある。

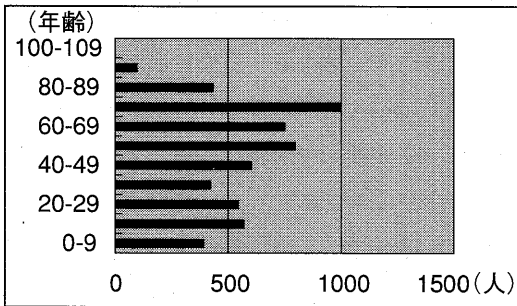
かつて、地域共同体は封建制を残存させる土壌であり、地域社会の民主的発展を阻害し、生活の合理化、近代化に対して弊害になっていると批判されてきた。地域共同体は因習や家意識によって個人の自立を妨げ、貧富の差を固定化し、統治の末端機構に住民を組み込み、上意下達の秩序を維持するための政治的支配力を保持してきた。こうした歴史的視点からは、共同体から個の自立が個々人の自己実現と社会の近代化にとって必要なプロセスととらえられ、学校のみならず社会教育もそのことを促進する役割を果たすことが期待されてきたといえる<sup>(2)</sup>。

しかし、このような矛盾的性格をもつ地域共同体も、高度経済成長期を通じて地縁の関係や習俗が次第に形骸化して流動性が強まるとともに、こうした状況をふまえて、地域課題に取り組むことを通じて共同性の絆を強め、地域社会を再建することが中間地においては高齢者を中心として顕在化しつつある。佐藤一子はこうした学びの広がりについて、行政側によって指導される社会の閉鎖性を打破し、地域住民が自ら意見を表明し地域づくりに参加することを可能にするような参加型社会の実現のためのネットワークづくりになりつつあることを指摘している<sup>(3)</sup>。そうした事例を岡山県中東部に位置する中山間地吉井町の事例をもとに、「地域社会における学び」から「地域社会を創る学び」への転換がどのように形成されつつあるかという視点で、地域社会における学びの活動に参加する「参与観察法」で考察する。

## 2. 吉井町における高齢者

吉井町は岡山県の中東部に位置し、県都岡山市から北へ41キロ、人口5600人、町域の76パーセントが山林の中山間地である。気象は瀬戸内気候の影響をうけ比較的温暖で年平均気温は15.6度、年平均降水量は1,395ミリ、台風や積雪などの被害も少なく自然条件に恵まれている。

美作と備前の国境であったことから、戦国、旧藩政時代を通じて交通や経済の要衝として栄えた。町の中心施設が集る周匝地区は吉井川と吉野川の合流地点で、近世から昭和初期までは高瀬舟の寄港する町であり、吉井川水系の物資の集散地として繁栄したところである。往時の町並みは現在の商店街の基を作りあげている。吉井町の発展はこの地域を中心として展開されてきた。1956(昭和31)年に旧5か村が合併して現在の町が誕生した。1960年の人口は9,315人であったが、35年間で約40%の人口減少である。基幹産業である農業は、生産基盤が零細なうえ、就業者の高齢化、後継者不足などの条件により生産性は低い。第二次産業では、就労可能な若年層を受け入れるだけの規模の就業所はなく、2～3の立地企業を除けば比較的中小の就業所が多い。第三次産業では就労者の数は増えているが、新たな雇用の創出は期待できない状態である。依然として続く人口再生可能な若年層の流出が地域に社会機能の低下、経済活動の停滞などの問題を生じさせている。1995(平成7)年の国勢調査での高齢化率は29.6%であり、このままの状態(コーホート変化率法を使用して推定)で人口が推移すれば、2005(平成17)年



<図1>吉井町人口ピラミット (2003年)

には、総人口5300人、高齢化率は38.5%となることが推定される<sup>(4)</sup>。

吉井町は65歳以上の高齢者が1931人、高齢化率34.5%である。一人暮らしは229世帯、老夫婦世帯は364世帯、介護支援対象者は50人である。60歳以上で元気に活躍している人々が約2000人いる<sup>(5)</sup>。彼らの多くは年金と自家農業で生活しながら地域での学習、

趣味、レクリエーション、ボランティア活動などに参加している。学習・活動を通して自己啓発、人とのつながり、社会変動への対応のみならず地域社会に何か役にしたいという願いをもつ高齢者が増えている。吉井町において、この元気な高齢者の人たちの生涯学習活動は今後ますます活発化していくだろう。そしてその量的な発展は質的な発展、すなわち参画型社会へ向かうと考える。

### 3. 高齢者を中心とした地域づくり活動の事例

#### (1) 生き生き太鼓サークル

生き生き太鼓サークルは会員数27名であり60歳代が大半を占め、最高齢者は81歳で、50歳代も若干いる。有名な曲をテープで流し女性は40cmに切った太い孟宗竹をばちでたたきリズムをとる。男性は5升樽を台の上に乗せてばちでたたきリズムをとる。リズムに合わせて演奏者も体を動かし演技するという音楽サークルである。

この会の発足は1999(平成11)年、町社会福祉協議会の職員が老人会を担当していた時、敬

老会の日に参加した高齢者とともに実施したら好評であったので、この人たちを母体として継続的に練習することで発足した。今では会員の中で世話役を決め相互の連絡調整を行っているが、振り付けなどは社会福祉協議会の職員がボランティアで行っている。

練習は月2回、町民会館で夜7:00～9:00まで行っている。指導者（社会福祉協議会の職員）が音頭をとりテープをかけると練習が始まる。1曲終わると誰とはなくこのところは右手をもっと高くまっすぐに伸ばしたらいいのではないかなどの提案がなされる。するとその提案を受けて会員各自がその通りに実践してみる。そしてどことはなしにその方がいいという声があがり演技は一部手直しされるが、その間指導者はあまり口を挟まない。指導者は新しい曲に向かう時に彼女自身が考えた振り付けを会員に提示する。会員はそれを受容するが、練習の中で会員相互の提案により修正し演技は完成していくのである。日本舞踊のように決まった型があってそれを学ぶのではなく、指導者による最初の振り付け指導は受けるが、会員各自の創意工夫が生かされるのである。共通の簡単な譜面はあるが、各自が自分の覚書として工夫した譜面を作っている。中には高齢で歩行にやや困難を抱える会員もいるが、演技で片足を上げてポーズをとる時には不思議と足が上がるという人もいる。時々まちがえる会員もいるが、指導者も他の会員もとがめることはなく、当人も恥ずかしがることもない。2時間の練習中休憩があるが、そこでは誰かが手作りの簡単なお菓子を持ってきてそれでお茶を飲み、今日の練習のこと、ある日のできごと、家族のこと、町の話題など楽しい雰囲気のなかで会話がはずむ。

会も2年を経て軌道に乗っている。そこで今では特別養護老人ホーム吉井川荘、デイサービスセンター、ねむの木クリニック<sup>(6)</sup>、町内のイベントなどに演芸ボランティア出演をしている。出演の時はそろいの法被にねじりはちまき姿で出演する。運転できる会員が分担して会場まで運ぶのである。練習中もそうであるが途中の休憩時、あるいは練習後の談話のときもまさに生き生きとした表情であったのが印象的であった。みんながサークル活動を楽しんでいることがよく伝わってくるのである。なぜこの会が楽しく、生き生きと活動できるのかについて考察する。

- ① 参加者一人ひとりの活動が受け身ではなく、自分がいいと思ったことを提案するとそれが受け入れられる雰囲気があり、各自の創造性が保障され、全体として創造的な学習がなされている。
- ② 参加者は人と人とのふれ合う楽しさをも求めて参加している。休憩時、練習後の歓談の中に楽しみがあるからである。活動を通して仲間意識が育ち、偶然地域の中で出会った時にもお互いが親しく声をかけ合う仲であるという。
- ③ サークル活動を通しての楽しさと、各地での演奏ボランティアも励みになっている。自分自身の楽しみと同時に、自分たちの演奏によって多くの人々が喜んでくれ、自分が人の役に立っているということを理屈抜きに実感することができるのである。
- ④ 社会福祉協議会職員でこの会の指導を担当している指導者の人間性、指導の姿勢も大きい

と考える。彼女(47歳)はこの地域で生まれ育ち、子育て終了後から社会福祉協議会へ勤務し始めた。短大卒であったので、佛教大学(通信教育)社会福祉学科を卒業し社会福祉士に合格。彼女自身もこうした地域の人々とのふれ合い、共に活動することに喜びを感じている。指導において彼女は決して命令口調ではなく、学習者の自己決定学習を常に尊重しながら指導にあたっている。宮脇陽三は生涯学習指導者の役割として、(ア)学習促進者、(イ)学習仲介者、(ウ)学習相談指導者、(エ)授業設計者技術者、(オ)生涯学習協力者、(カ)生涯学習者、(キ)共同学習者、(ク)学校・地域社会教育統合者(調整者)という8つの役割を遂行していくのである<sup>(7)</sup>としているが、彼女の指導はこの8つがすべてあてはまる。

## (2) ボランティア団体「みつわ会」

ボランティア団体「みつわ会」は、町社会福祉協議会との連携を保ちながら、独自の会員・規約・会計をもつ元気な高齢者を中心とするボランティア組織である。会員は男性3名、女性44名である。「みつわ」とは「人と話しかける輪」「人と人と手をつなぐ輪」「人と人の心をつなぐ輪」、この三つの輪を大切にするという意味である。会則ではこの会の目的を「吉井町に在住する住民の自主的な福祉活動を通じて地域社会の福祉水準の向上を図るとともに、人間形成と会員相互の親睦を図り、あわせて地域福祉の推進に寄与することを目的とする」としている。この会は1982(昭和57)年、現会長である本荘多加代(81歳)が地元の会社を定年退職し時間的余裕が生まれた中で結成された。彼女は会社勤務の傍ら町婦人会会長、愛育委員の活動などを熱心に行っていた。そうした活動を通して知り合った10名に呼びかけて会を結成した。最初は月2回、特別養護老人ホームのシーツの整頓ボランティアから始めた。次にデイサービスセンターでのレクリエーションと介護、ねむの木クリニックでの演芸ボランティアに活動を広げていった。現在では、町内の知的障害者団体が作業所で行う仕事の手伝いにも手を広げている。この活動には26名の会員が参加している。26名の会員を3～4名ずつ8班に分け、毎週金曜日と土曜日に活動を行う。活動内容は障害者たちが箸を箸袋へ入れる作業、菓子箱折りの作業を手伝うことである。

会の会計は、町内の各種イベントでのバザー収益が中心である<sup>(8)</sup>。ボランティア活動であるが、弁当代とガソリン代は会の負担になっている。なぜボランティアに励むのかについて会員の一般的答えとしては以下の通りである。

- ① こうした活動を通して人とふれ合うことができるのが楽しい。
- ② 自分の楽しみだけでなく、自分の活動が地域社会に役立っている、活動を通して豊かで住みよい地域づくりに自分も貢献していることが実感でき充実感が得られる。
- ③ 活動を通して、この年でもなおかつ自分が成長しているという充実感が得られる。
- ④ 現在50歳代の人が私たちに「頑張ってください、私も仕事を辞めたら一緒に活動をさせてもらうから」と声をかけてくれる人がある。そのことは嬉しいと同時に、自分たちの活動が

次世代にも引き継がれるだろうという確信がもてることもまた嬉しい。

近年、ボランティア活動は大きな関心を集めている。高齢化社会に対応する新たな社会システムの構築など社会に対して果たす役割が注目される一方、個人にとっても社会経験の広がりや自己実現の契機を含んだものとして注目されている。ボランティア活動の活発化は人々のもつボランティア観、活動に対する意味づけなど観念のレベルでも変化がみられる。つまり長年一般的だった「無償の行為」「奉仕活動」というボランティア観に変わって、新しいボランティア観が広がってきている。それは、自分独自の見返りを求めて行われる活動の結果として他者の幸福や社会の改善に結びつくというように、ボランティア側のメリットを強調するものである。その方向はボランティアをすると相手に喜んでもらえ自分も楽しいという「情緒的報酬」と、活動の中で新たな経験、発見、あるいは仲間との交流を通しての自己の成長を感じることができるという「成長的報酬」である<sup>(9)</sup>。

今日吉井町では社会福祉協議会を通じて、あるいは独自の組織、個人でボランティア活動に取り組む人たちが確実に増加している。活動に参加している人たちは相手に喜んでもらう、自分自身も楽しいということに留まらず、活動を通して心豊かで活力あるまちづくりのために、自分の活動を通して地域社会に役立ちたいという願いをもっている。高齢化社会の進展、地方財政の逼迫化の中で、今までのように行政に要求し行政に頼る住民から、地域のことは地域住民の力で解決していこうとする動きは着実に進んでいるのである。

### （３）コスモス祭り

吉井町の中心地周匝集落には中世の山城跡がある。1986（昭和61）年「歴史とロマンの里づくり事業」により、鉄筋コンクリートで2階建ての山城を造り、周辺を整備し城山公園を造った。この公園のすぐ隣に、旧岡山藩家老片桐池田氏累代の墓所がある。子孫は広島在住であるゆえ墓所は荒れ放題であった。8年前、周匝集落を中心とした有志で「周匝史跡保存会」を結成した。墓所は私有地ゆえ公的機関が管理することができないからである。会の活動は墓所の清掃、それに城山公園の草刈り、清掃、桜の木の剪定、施肥、消毒、それに中近世の周匝についての学習である。実際に活動に参加する会員は30名、その他年1000円の会費だけ払ってくれる賛助会員が35名である。

公園の桜の木の管理をボランティアで行うのであるから、自然の成り行きとして桜の満開の季節に会員どうして花見の宴を催した。その時の話で、次回からはせっかくだから会員以外にも参加してもらおう「桜祭り」を企画し周りに呼びかけた。お茶の先生は会場での野点を引き受け、地元の酒造会社は樽酒の寄贈など多くの人が結集し「桜祭り」を開催した。町内外から多数の参観者で賑わった。このことに自信を深めた「周匝史跡保存会」は、元旦の「初日を見る会」、10月の「名月鑑賞会」にも手を広げ定着させている。こうした自主的サークルによるまちおこしの活動に対して行政側も町長の参加、城山公園の実質的な管理者である町産業課が非公

式な形で参加することで支援している。城山公園を会場とした自主的なまちおこしの活動は年々参加者も増え定着化している。

このサークルの目的は身近にある史跡を自分たちの世代で管理し、それを次世代へ引き継ぐ、そのために学習しボランティアで維持・管理することにある。こうした自分たちの活動を身近な人々に広げ、共に史跡保存に目を向けようと3つのイベントを企画した。すると意外に多くの人々に賛同を得ることができ、彼らの自信につながった。彼らの活動はそこに留まらず、次々と地域の課題を発掘し、それに取り組む方向へ発展しつつある。

吉井町東部には一級河川吉井川が流れ、約4キロメートルの堤防に囲まれている。7年前まで堤防には草が生い茂り、時には住民によるゴミ投棄も行われていた。河川及び堤防の所有権は国土交通省であり、実質的管理は県東備振興局があたっているが、長年堤防の草刈は行われていなかった。「周匝史跡保存会」のメンバーが中心となり集落の人たちに呼びかけ、周匝集落住民の力で集落に属する堤防2.2キロメートルの草刈りを行った。その後、「周匝史跡保存会」のメンバーを中心に、せっかくきれいにしたのだから堤防・河川敷へコスモスを植えようということになった。暑い夏には役場から散水用のタンクを借り、軽トラックに乗せて水を散布してコスモスを丹念に育てた。9月中旬には堤防・河川敷いっばいにコスモスの花が咲き美しい光景を作り出した。すると町内外からカメラを持ってコスモス風景を見学に来る人も現れ始めた。

1997（平成9）年、「周匝史跡保存会」のメンバーを中核にしてその他自主的サークルで積極的に活動している人たちが集まって実行委員会を結成し、吉井川堤防での「コスモス祭り」を企画した。当日は実行委員会20名が中心となり、当日だけのボランティアの人も約50名結集した。祭りの内容は午前10時にオープニング、午後3時閉会。堤防にテント14張を設置し、吉井川で捕れたれた鮎の塩焼き、川魚のから揚げ、うどん店、それに祭りを広く呼びかけているので町内のいくつかのサークルがフリーマーケットを開いた。町内の「傘踊りサークル」が友情出演し、「案山子コンテスト」も行われた。町内外の人々に開かれた祭りとして企画されているので約3000人の参加者があった。人口5600人の町で3000人の人が集まる企画を成功させることは意義あることである。今日、「コスモス祭り」は町内で多くの人々に知られたイベントになっている。「コスモス祭り」は昨年5回目を終えたばかりの祭りである。一方吉井町には行政主催による4つの大きなイベントがある。そのなかのひとつで「コスモス祭り」と同じ10月に開催される「ふるさと祭り」<sup>(10)</sup>があるが、行政主催のこの祭りには300万円の税金がつぎ込まれている。今日地方自治体は財政難に悩んでいる。そうしたなかで町主催の「ふるさと祭り」を廃止して「コスモス祭り」に合流する計画が進行している。

町内に1学年の定員80名の岡山県立備作高等学校がある。毎年実質入学者は60名強の小規模校である。少子化による高校入学人口の減少に伴い、県当局は高校再編成案を発表した。備作高校は毎年定員割れする学校でもあり廃校の候補にあがっている。こうしたなかで、備作高校

の校長は地域が必要とする学校になれば存続が可能になるのではないかと、そのために地域と連携したカリキュラムとしてコスモス祭りへの全面的な参加に踏み出した。コスモス祭り実行委員会との数度の話し合いで、①コスモス祭り当日の参加だけでなく、高校側が独自にコスモスを植え管理するエリアを受け持つ。②コスモス祭り当日、高校独自のテントを張りイベントを担当することで合意し昨年取り組んだ。

備作高校は普通科で、情報コースと生活コースがある。生活コースでは農業実習がある。この時間にコスモスの苗を育て堤防へ移植し管理した。また祭り当日、情報コースのテントではコンピュータを使って名刺をつくり参加者にサービスした。生活コースは自校農園で収穫した野菜の即売を実施した。備作高校は03年中学生向け入学案内の表紙一面に、吉井川堤防にいっぱい咲き乱れるコスモスの花とその管理に汗を流す高校生の群像を取り入れた。それを見たコスモス祭り実行委員会の人々は歓喜した。また、高校近くにある周匝幼稚園も実行委員会から独自のエリアを引き受けコスモスを育てた。幼稚園の作業日と高校の作業日が重なった時、高校生が幼稚園児をずいぶんかわいがったそうである。中学校は学校として直接コスモス祭りには参加していない。地域の一員として祭り当日、ボランティアの一員として出店の手伝いをする生徒もいる。選択社会科では実行委員会の方に来ていただいてコスモス祭りの意義について語ってもらい、堤防へコスモスの花を見に行く。

吉井町における「コスモス祭り」の企画では、20名の実行委員が核となり、ボランティア活動に参加してくれる多くの人を組織している。実行委員会に結集している多くは60歳代、70歳代の人たちであるが、彼らは青年期において地域青年団活動を活発に行った人たちである。地域は過去この地域で生きた人々、今生きている人々、そしてこれから生きていくであろう人々の連帯によってつくられていくものであるという感覚を、学習と長い人生の経験によって認識している。その歴史の過程のなかで、自分たちが生きた証として何か地域の活性化に役立ちたい、自分の力を地域に還元したいという願いが背景となっていると考える。そして、地域社会にかかわろうとする生き方への共感や他者と共にあることを通じて自己の再発見、身体を動かすことによって初めて体験的にわかる学びなどの諸要素を伴った自己形成を行っているのである。彼らの行動原理は利潤動機ではなく、自分たちの地域社会を今よりよくしようという使命を共有し、よりよく生きることを支える社会のオルタナティブを実現する活動なのである。吉井町における「周匝史跡保存会」サークルを中心としたまちづくりの活動はまわりの人々をまき込み、試行錯誤の過程を共有しながら、「よりよい地域社会」を創造する営みに共に参加すること、そして自分たちだけでなく1日だけのボランティアに参加してくれる人、それにイベントに参加する人々に対して、地域づくりについてインフォーマルな教育を提供しているのである。共同体に蓄えられてきた民衆の知恵や文化と、現代的な市民的行動原理に立った社会認識や価値意識が相互関係をもちながら創造的に発展していつている。こうした地域に根ざした学びが高齢者を中核として進展している。



#### (4) 吉井町20世紀回顧展

吉井町生涯学習センターは1999(平成11)年に開館した。建物は600m<sup>2</sup>、一階が図書室、二階の半分は吹き抜け天井で半分はギャラリーと研修室、談話コーナーが設置されている。町民の生涯学習に開放されていて、研修室は公民館自主活動グループの活動に活用されている。こうしたなかで、町内の自主活動グループで中心的に学習している数名と、生涯学習センター館長との日常的な会話の中から、ギャラリーを会場として「吉井町20世紀回顧展」を企画しようという話がもちあがった。その時点ではまだ話題の段階であったが、彼らが公民館自主講座などで積極的に活動している人たちに呼びかけ意気投合して実現へ向けて歩み始めた。

2001(平成13)年5月中旬、6名と館長が中心となり実行委員に加わってくれそうな人に打診し、20名からなる実行委員会を結成した。6月1日の第1回実行委員会で「吉井町20世紀回顧展」の意義、具体的なイメージについて話し合った。6月15日の第2回実行委員会で、生活用品を集める係り、写真を集め展示用に引き伸ばす係り、農具を集める係り、年表・案内文を書く係りと分担を決定。以後、精力的に町内のめばしい家庭を回り展示物を集める作業を行った。写真係りは町内の家庭から、あるいは「広報よいし」、「自治体史」その他から写真を集め、生涯学習センターのコピー機にて展示用の写真に仕上げた。6月29日の第3回実行委員会では場内展示レイアウトについて話し合い、7月5日から13日までは連日オープニングに向けて展示作業に精をだした。50年前の日常的な民家の様子を展示するため、囲炉裏を手作業で設置するなど精力的に活動した。7月11日には岡山県内で最大販売部数を誇る「山陽新聞」が「吉井町20世紀回顧展」が開かれることを報道した。

7月14日の開会式には町長、町議会議長、教育長も出席した。期間中参観者は少ない日で31名、多い日には165名であり、16日間で1200名の参観者があった。参観者のほとんどは町内の人であり、町民の20%が参観したことになる。実行委員は毎日10名が会場に詰め学芸員として参観者への説明と対話にあたった。

この期間中中学校は特別の時間割を組み、全校生徒176名をクラスごとに参観させた。参観にあたって学校は事前に実行委員会へ連絡をとり、クラスを班分けして班に1人の学芸員に説明にあたってもらった。中学生は会場に入ると、まず実行委員から「吉井町20世紀回顧展」の意義についての説明を聞き、そのあと相互に簡単な自己紹介を行って参観に入った。実行委員の湯原登句美(75歳)は草木染めサークルでも活動している。この日、自分で染めた野良着、もんぺを着用して説明にあたった。生徒にとって展示物のほとんどが初めて見るものであり、写真を通して昔の人々の生活を知ることができた。この中学生と実行委員との交流を通して、中学生は豊かな地域社会づくりを目指して取り組んでいる人たちの「態度的価値」<sup>(11)</sup>に接することができたことは有意義であった。この中学生と実行委員会との交流の様子は、7月24日「山陽新聞」が写真入で報じた。

吉井町においてこうした学芸的催しで1200名の人々が参加したことは画期的なことであった。

「吉井町20世紀回顧展」の経費は、生涯学習センターが展示場を提供し写真のコピーを無料で提供したこと以外はすべて実行委員各自の手弁当によるものであった。実行委員はさまざまな自主的サークルで中心的に活動している人たちである。学習サークルへの参加を通じて、参加者主導の運営と人々との友愛の深まりという「参加の文化」を形成し、そこからより新しい学習関心を広げていっているのである。彼らの願いは「吉井町20世紀回顧展」を通して地域住民と共に地域の20世紀の歩みを振り返り、今後の地域社会のありかたについて地域住民と対話すること、すなわち新しい社会創造の営みである。ここには、個々の生活者が今と将来の暮らし方、人間関係、社会のあり方について、こうでありたいという願いをこめて提案し、実験する過程、いいかえれば参加と共同を通じて持続的な社会との関わり方を探求する過程であるといえる<sup>(12)</sup>。

この「吉井町20世紀回顧展」を通して実行委員会は地域社会において、準公共的性格をもった事業を行う団体として認知された。この公共性は行政のお墨付きによってではなく、多くの地域住民にとっての共通の課題を行政とはちがった手法で解決していくことによってより多くの住民が問題を自覚し、参加するようになる過程自体が生み出す新しい公共性であるといえる。実行委員のみならず参観した住民も含めて、種々の新しい経験を獲得した。この経験は既存の知、すなわち地域の課題は行政にまかせればいいというのではなく、住民が主体となって自ら知恵と力を出し合い、住民との連携のもとで解決していく道があるという新しい知の創造へつながっていく、それ自体貴重な学習でもあった。

総括会議において、彼らは自分たちの企画が地域住民に支持されたことに自信をもち、来年度からも地域社会における課題をテーマに展示会を企画し、住民との対話を深めようと計画している。来年度からの具体的な計画を彼らがもっているわけではない。だが、本年度経験した住民と共に地域の課題を考えていこうとする貴重な体験をもとに、来年度からは多くの自主的サークルと連携して、新しい課題を提起してくるであろうと考える。

#### 4. まとめ

コスモス祭りの会場となる河川の堤防に隣接した河川敷に、1994（平成6）年に県が工事を行った約2haの河川公園がある。造成には約4.6億円が投下された公共事業である。これは住民あるいは自治体が要求したものではなく、県が計画実施したものである。造成後の管理は吉井町に委託された。1998（平成10）年この地を大雨が襲い河川公園は泥の中に埋まってしまった。この時はバブル崩壊期であり、県は復旧予算を組むことなく公園は荒れるままに放置されている。一方堤防にはコスモス祭り実行委員会によるコスモス園が広がり、対照的な光景を作り出している。そこには行政によって与えられたものに満足する住民の姿ではなく、自分たちが主体的に関与することを通して連帯を深め、自分たちの力で地域を創生していくという新しい価

値観への転換がなされつつあることを読みとることができる。

1990年代のバブル崩壊は多くの人々に今までのような物質的豊かさのみを求める生き方から、生活の質を重視する生き方へと眼を開かせた。今日吉井町においてそうした生き方を求めて活動の中心になっているのは高齢者である。中山間地において高齢者は多数を占める年齢層でもあり、経済的には年金と農業で安定した生活を送っている。同時に家のみならず地域社会を自分たちで支えなければならないという自負心をもっている。彼らの活動の組織原理は、従来型の伝統的な地域社会に根ざしたコミュニティ組織を基盤とするのではなく、共通の要求によって組織されたアソシエーション的組織を立ち上げ、生活、福祉、文化、環境の共同の活動を創り出す動きが顕著になりつつある<sup>(12)</sup>。こうした活動は豊かさのなかでの自己管理だけでなく、学習、活動を通して連帯を深め合うこと、地域づくりのために少しでも役に立ちたいという願いを共有している。こうした活動は共同の力で自分たちの文化を創り出すことを大切にしており、それがさらに周囲の地域住民の合意を創り出し、少しずつ地域社会が動き始めているといえる。今日、こうした高齢者を中心とした地域づくりの動きは、消費文化に埋没する生き方から、自分らしい生き方を追求する生き方への価値観を転換させる可能性を秘めているといえる。

#### 〔注〕

- (1) 平成11年「生涯学習審議会答申」
- (2) 佐藤一子著『生涯学習と社会参加』東京大学出版会、1998年、p.158
- (3) 佐藤、同上書、p.66
- (4) 吉井町編『吉井町地域振興計画』、吉井町、2001年、p.3
- (5) 吉井町社会福祉協議会発行パンフレット『集落別高齢化比率表』2001年
- (6) 吉井町の中心地区周匝（すさい）にある開業医が経営するケアサービス施設
- (7) 宮脇陽三編著『教育学』ミネルヴァ書房、1997年、p.420
- (8) 「みつわ会」の会計報告書によると、バザーによる収益は9万円。町からの補助金1万円。その他町内最大の建設会社「西山組」からの寄付金。支出の主なものとは弁当代9万円、ガソリン代3万円となっている。
- (9) 箕浦康子著『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房、1999年、p.112
- (10) 町役場が主体で、34の集落の代表が実行委員になり、役場の広場で行う。実態は役場の職員主導のイベントである。参加者はほとんど町内の住民である。約1000人が集う。
- (11) 和田修二著「高齢社会における高齢者の社会参加」、『教育学部論集』第9号、佛教大学教育学部、1998年、p.25で使用されている語句である。まわりの人々に深い安堵と浄福を感じさせるような、静かで穏やかな、威厳のある生き方を通して感化を与えることを意味する。
- (12) かつて町内34集落には婦人会組織があり、その連合体として吉井町婦人会、赤磐郡婦人会が存在し、

ルーティーン的活動を続けていた。女性の職場進出などで会は形骸化し、会員の間には負担感が沈殿化していた。1998（平成10）年有志数人で教養の向上、会員間の親睦、青少年の健全育成、環境問題に取り組むという目的を明確にし、任意加入の「女性フォーラム」を立ち上げた。この会の誕生により吉井町婦人会は解散した。中山間地においても従来の伝統的地域社会に根ざしたコミュニティ組織から、共通の要求によって組織されたアソシエーション的組織が生まれてきていると言える。

#### 〔参考文献〕

- 佐藤一子著『生涯学習と社会参加』東京大学出版会、1998年  
相庭和彦著『生涯学習から地域教育改革へ』明石書店、1999年  
和田修二著「高齢社会における高齢者の社会参加」、『教育学部論集』第9号、佛教大学教育学部、1998年  
日本社会教育学会編『高齢社会における社会教育の課題』—日本の社会教育第43集、東洋館出版、1998年

#### 〔付記〕

本研究は、2001年度佛教大学通信制大学院教育学研究科生涯教育専攻の修士論文の一部を抜粋、修正、加筆したものである。

(こいで たかし 岡山県吉井中学校教諭)

(指導：田中 圭治郎 教授)

2003年10月15日受理